

社会に出る前に

五年 S・T

高校生活も半分をとうに過ぎ、社会に出る時がそう遠くないことを意識するようになりました。「社会に出る」ということの定義は、恵泉を卒業する時、大学に入る時、あるいは就職して働く時など、人それぞれあるでしょう。しかし誰にでも言えるのは、この恵泉女学園高等学校という、小さな世界の外にある、もっと大きな、新しい社会が待っているということです。その社会に出るまでに私たちが備えるべきものは何でしょうか。

皆さんは「コミュ力」や「コミュ障」という言葉を聞いたり、使ったりしたことがあるでしょうか。「コミュ力」というのはコミュニケーション能力の略で他者とのコミュニケーションを上手に図ることができる能力として使われ、「コミュ障」はコミュニケーション障害を意味し他者とのコミュニケーションが非常に苦手だったり苦痛だったりする人のこととして、最近よく耳にするようになりました。

私はよく、「コミュ力がある」と言われることがあります。確かに私は、先生や先輩といった目上の人と話すときに緊張せずに会話を続けることができます。また、初対面の人にも自分から積極的に話しかけるタイプです。ですから、自分でも自分のいわゆる「コミュニケーション能力」には自信を持っていました。しかし、ある友人との関係がきっかけで、本当のコミュニケーション能力とは何なのか、考えることになりました。

その友人と私は、中学で知り合って初めのころ、それぞれの趣味や部活のことなどについて話す機会が多くありました。しかし、今考えてみると、その時はまだ表面的な付き合いだったと思います。だからこそ、なのかもしれませんが、人の批判や悪口めいた話をするこもしばしばありました。その時は特に気にしていなかったのですが、高校生になってその子と同じクラスになり、一緒に過ごす時間が増えて初めて、「自分は彼女にいったいどう思われているのだろう」ということが気になり始めました。これは、表面的ではなく、もっとお互いを知って仲良くしたいと思うようになったからこそなのですが、一度気になりだすと、自分の発言や行動がどう見られるのか怖くなり、その子が持つ価値観や考えに触れることを恐れるようになりました。そして、仲良くしたいという気持ちとは裏腹に、その子と上手くコミュニケーションが取れなくなって

しまったのです。

私にとって、このように相手をもっと知りたいと思ったのも、相手を知ることを恐れたことも、初めての経験でした。そこで考えてみると、つまり私はそれまで相手を深く知ろうとせず、上辺だけの関係を築いていたということになります。初対面の人に積極的に話しかけられるのは「相手にどう思われても構わない。」という心理に基づいていたのだと思います。好きなように振る舞って、もし相手が受け止めてくれなくても、相性が合わなかったのだと結論づけ、違うアプローチを試そうともしませんでした。これは一方的で、非常に自己中心的なやり方だったと思います。また、人との関係性を深めていくということは相手の良いところも悪いところも怖いところも見えてくることなのに、それまでの私はその一つ一つのプロセスから逃げていました。つまり私のコミュニケーションは、自己中心的、かつ、相手と深く関わりそうだと察知するとそこから逃げてしまうという、臆病なものだったのです。そしてそれは自分の考えや発言がどのように受け取られるのかということに対する、大きな不安によるものだ気づいたとき、私は自分のこの性格を厄介だと思いながらもどうすることもできないでいました。

その頃、後から考えれば、自分には荷が重かったであろうことに私は挑戦しようとしていました。そんな私を、彼女を含めた友人たちが私の性格を鑑みて止めてくれたことがありました。前に述べたとおり、自分の発言の受け取られ方を過度に気にしてしまう臆病のせいで、私は仲間を頼ることができずに悩みをため込んでしまっていました。彼女たちはそれを真っ直ぐに指摘して、私に思いとどまらせてくれたのです。その時は不思議とその言葉を素直に受け取ることができました。それ以前に気づいてはいたものの、この性格をどうすることもできなかった自分が、救われたような気さえしたほどです。

これらの経験から、本当のコミュニケーション能力というのは、ただ会話を続けられるというものではなくて、相手を知ろうとする意識と相手に知ってもらおうとする勇気を兼ねているべきだと思い、この二つが私にはなかったことがわかりました。これらを手に入れるには相手への過度な気遣いはかえって邪魔になります。間違った受け取り方をされたら説明しなせば良いことで、そのための努力こそがコミュニケーションの本質ではないでしょうか。これらの経験は私に、知ることを恐れなくて相手に関心を持つようにするという大きな意識改革をさせてくれました。

さて、友人同士の関係の他に、学校には、担任と生徒、顧問と部員、先輩と後輩といった関係も存在します。ここではお互いの持ついわゆる「価値観」の違いを感じる場合があります。例えば部活内で、私たちが「当たり前」だと思っていることをやっていない後輩に注意したとして、後輩の側に「当たり前」という認識がなければ私たちの注意は響かなくなり、「先輩は理不尽だ」と思われてしまいます。たった一つ二つ年齢が違っただけでもこういったことが起こるわけですから。

多くの人の似たような経験が形成する共通の価値観は特に「常識」などと呼ばれます。一人で「これは常識だ」と言い張ったところで共感を得られなければ「常識」にはなりません。これが社会常識、ともなれば、かなりの数の価値観が集まって形成されるのですから、圧倒的な力を持ちます。しかしここで重要なのは、「常識」は複数存在可能性があるということです。どれだけ似たように見える価値観も一つに集約することはできません。誰かが集約して定義してしまうとそれは「法」や「ルール」になってしまうからです。先ほど挙げた部活内での例のようにわずかな年の差であっても、もしくは同い年であっても、それぞれの家庭や地域が違えば常識の衝突は免れません。ましてや、社会で出会う人の年齢差も人数も格段に大きくなるにつれて問題は深刻化するでしょう。自分の持つ「常識」と異なるそれに出会ったとき、人は少なからず動揺します。自分が間違っているのかと不安になる人もいれば、自分は間違っていないと反発する人もいるでしょう。人が持つ常識はその人のアイデンティティの一部とも言えるのでそれを守ろうとするのは当たり前です。しかし自分を守るばかりで良い対人関係を築けるのでしょうか。言い方を変えれば自分の考えだけを押し通して社会で生きられるかということです。

私は自分の知らない価値観や「常識」を否定しがちであり、分かろうとしなかったと思います。ここで、相手を知ろうという意識と共に相手を受け止める寛容さも大事だと思いました。時には相手の間違いを正すことも必要ですが、頭ごなしに否定するのではなく様々な意見を聞ける余裕を持つべきです。

今まで何らかの形で大人から庇護されてきた私たちが、その手から離れることが社会に出るということだと私は思います。自分で自分の進路を決めようとしている私たち高校生はまさに社会への第一歩を踏んでいるのではないのでしょうか。クラスで友人関係を学んだり、部活で上下関係を学んだり、学校はまさしく社会の縮図といえます。実際の社会では本当の意味でのコミュニケーション

コミュニケーション能力が必要とされることでしょう。今の時代、SNSの普及などで顔も知らない人の意見を知ることが可能になったり、グローバル化の促進で、国を超えたコミュニケーションが可能になり、多様な価値観に触れることが増えていきます。そのような社会で生きていくために、本当のコミュニケーション能力を備えた、確立した自分でいたいものです。